

8月13日(金)の公演、「武満徹のギター音楽「小さなオーケストラ」の小宇宙」を控え、演奏者の藤元高輝さん、作曲家の伊左治直さんに、武満徹のギター作品についてお話を伺いました。(聞き手:東京コンサーツ、平野貴俊 構成:平野貴俊)

### まず、藤元さんの武満徹のギター作品との出会いについて教えていただけますでしょうか？

藤元——最初は、《ギターのための12の歌》(以下、《12の歌》)の〈オーバー・ザ・レインボー〉や〈イエスタデイ〉などを個人的な興味から弾いていました。東京国際ギターコンクール(2011)では、課題曲《エキノクス》を弾きました。その後、佐藤紀雄先生の録音された《フォリオス》を聴いて、こんなに美しい曲があるのかと感動して、現代音楽をあまり聴かない人向けの演奏会で、プログラムに時折入れたりしていました。5年前の武満さんの没後20年に合わせて、フォンテックからソロ・デュオ作品全集のCDを出すことになり、それを機に集中的に勉強しました。録音に先立って、どの曲も少なくとも5回は演奏会で弾いていたと思います。ソロ以外では、アルト・フルートとの二重奏《海へ》を2020年にパリで演奏しました。没後20年で録音を出し、5年経った現在、ひとつの区切りが付いたように思います。

### 5年前の録音時から現在までのあいだに、気づいたことはありますか？

藤元——録音ではもちろん最善を尽くしましたが、CDを聴いてみて、ここをもっとこうすればよかった、と思うことがありました。1段の五線譜に複数の声部がある場合、指示されているダイナミクスがどこに対応しているのか、アクセントが音響全体を対象としているのか、それとも局所的に適用されているのか、とか。演奏会では、そうした新たな発見も含めて、楽譜からどういう解釈が引きだせるかをお伝えできればと思っています。伊左治先生のギター作品では、これまでに《熱帯伯爵》、《夜の黄金》を弾いたことがありますが、そのときは直接先生からアドバイスを受けました。僕は武満さんに直接お会いしたことはありませんが、もし武満さんが自分と知り合いだったらどういったアドバイスをくれるだろうと考え、録音の後、武満さんが話している映像をYouTubeで見るなどするうち、話しぶりと音楽には何か関連があるかもしれないと思うようになりました。

伊左治——それは確かにあると思います。僕はぎりぎり生前の武満さんを知っている世代ですが。

藤元——武満さんを知っていた先生にレッスンを受けると、「武満さんはこう言っていた」という話をよく聞くのですが、先生によっておっしゃることが違うので、武満さんはギタリストによって言うことを変えていたのかもしれない。

伊左治——《12の歌》は、ジョン・ウィリアムスの録音で初めて聴きましたが、その後荘村さんの演奏を聴いて、テンポがずいぶん遅いのでびっくりした記憶があります。武満さんは、演奏家によって解釈が違ってもいいと考えていたような気がします。私も作曲家として、演奏家がどういう解釈をしてくれるのかはとても気になります。

**藤元**——伊左治先生の曲と武満さんの曲で共通していると思うのは、積み重ねていってひとつの構築物を作るというよりは、点と点を曲線で繋げているといった印象を受けることで、その繋げ方を掴むことができれば、ある程度自由な解釈ができるのかなと思います。伊左治先生の作品にはとくに即興的な印象がありますが、武満さんの音楽にも、ヨーロッパの音楽とは違う自由さがあると感じます。《フォリオス》の楽譜は手書きの譜面を印刷したのですが、音価に合わせて、音符の間隔が自由に伸縮しています。また 1 曲目は複縦線で閉じられていますが、2 曲目ではそれが少し太くなり、3 曲目では終止線になっているというように、遊びが感じられます。

**伊左治**——フォークの流行もありましたし、日本の状況が武満さんの趣味に合っていたということはあると思います。

**藤元**——ヨーロッパでは当時ギターが改良されていて、ヨーロッパと日本では奏法が異なる点もあるので、武満さんも献呈先によって書き方を変えているのかもしれませんが。《森のなかで》のうち、荘村先生のために書かれている曲には小節線がないのですが、それ以外の作品には小節線がある。誰を演奏者として想定するかによって、書き方を変えていた可能性は高いですね。

**藤元さんにとって、どの作品が一番難しいと感じましたか？**

**藤元**——《12 の歌》です。まずは原曲の歌詞をすべて書き出し、どこまでルバートするか、なぜここにアツチュエランドがあるのかなどを考えながら、馴染みのない動きを何度も繰り返して、身体に覚えこませました。《12 の歌》は、アマチュアにはお勧めできませんね。逆に取り組みやすいのは《エキノクス》と、《すべては薄明のなかで》の最終楽章です。武満さんがギターを弾いていたという話を聞いたことがありますが、本当は弾けなかったか、それとも逆にギターがある程度弾けて、敢えて難しく書いたのではという気がします。

**伊左治**——私はギターを弾けないので、たぶんこれは弾けるだろうな、などと想定しながら書くのですが、これは弾けないだろうと考えたことを、ギタリストが難なくこなしてしまうこともあります。それから、ギターの 6 弦のもつ機能というか、可能性には驚かされますね。

**藤元**——バロック・ギターとモダン・ギターで多少の違いはありますが、いまも 19 世紀の教本が使われたりしているので、調弦という点では完成された楽器ですね。

**伊左治**——たとえばギターだけでサンバ隊の音楽を再現できたりといったことは面白いですね。それに、ギターには濁った響きが基本的に存在しません。ギターと比較すると、ピアノには制限があると感じます。その調弦を上手く使い、たとえば ボサノバのリズムは、サンバの合奏をギター1本だけで実現できるように作られましたが、そういう発想は面白いですね。それと、不協和音というかギターには濁った響きが基本的に存在しないと思います。同じ音でもピアノで弾くと違和感ある響きも、ギターだとまったく自然に聴こえるのは興味深いです。

**藤元**——ギターは音が小さい楽器ですが、その音に含まれる多彩なニュアンスが魅力です。音の減衰も重要な

側面で、聴いている人に消えた後の音を想像させることが理想です。今日では、大きなホールで演奏できるように改良されていますが、大きい音のギターを選ぶのではなく、より小さなホールを選ぶべきと思っています。

### 弦の種類によって、残響は変わるのでしょうか？

藤元——はい、楽器にもよります。音をピタッと止めてしまうのは、とくに武満さんの作品ではあまり望ましくない箇所が多いと思います。どういう楽器で武満作品を弾くかは興味深い問題ですが、個人的にはトラディショナルな楽器を使って、歌を充実させたいです。

### 武満さんのギター作品のもつ意義について、どのようにお考えになりますか？

藤元——それは武満さんを直接知らない世代の演奏家が、今後発見していくべきものと思います。日本では、武満さんの本という対談やエッセイが多いイメージがありますが、欧米では楽曲分析が豊富に行われていて、練習にあたっては西洋音楽と同じ取り組み方が求められます。楽器の改良も必要だと感じます。たとえばドイツでは、19世紀ギターの研究が盛んではなく、張力の強いモダンな弦と長い爪(本来は短めの爪か指頭)で演奏することが多いので、19世紀ギターのレプリカを製作する人たちは、それに対応したモダンな作りになっています。よりよい表現を求めるギタリストが増えれば、その方向で楽器も改良されていくと思います。

お話の続きは、会場にて！

武満徹のギター音楽「小さなオーケストラ」の小宇宙

昼の部 14:00 開演

夜の部 18:30 開演

会場：[トーキョーコンサーツ・ラボ](#)